八木町（やぎちょう）

旅人が間断ない札の辻

古代の「八木」は、南北の下ッ道（後の中街道）と東西の横大路が交わる一帯に交通の要衝として生まれました。中世の古文書によりますと「数百間の屋形」が立ち「矢木市」とも呼ばれました。横大路の北側が十市郡に南側が高市郡に属したため豪族支配の境界域となり、北側の十市氏と南側の越智氏が争いを起こすと町屋はその都度、兵火に焼かれました。兵火のたびに急速な復旧を繰り返した町並みも、江戸時代になると争乱が途絶え北側が郡山藩領に南側が高取藩領になり、元禄時代に北側が幕府直轄の天領となったあと安定した発展をみせます。

江戸時代の中期以降この地を、吉野・高野詣（もうで）や大和巡り・伊勢参りなど大勢の人々が全国から訪れ、街道町として栄えると同時に奈良盆地南部の拠点としても注目を浴びます。旅行案内・西国名所図絵が「晴雨暑寒をいとわず―平生に旅人間断なく」と街の中心「札の辻」のにぎわい振りを紹介しています。

江戸・明治時代から北側を「北八木村」、南側を「八木村」と呼んできました。これが昭和三一年の橿原市発足に当たり「北八木町」と「八木町」になったわけです。